

2020年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	ヤングケアラーのケア役割経験に対する認知の両価性に関する研究
キーワード	①ヤングケアラー、②ケア役割経験、③家族支援

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	ヒワタシ ユキ 樋渡 由貴	所属等	九州女子大学 人間科学部 助教
プロフィール	専門領域は臨床心理学であり、臨床心理士、公認心理師の資格を取得している。九州大学大学院人間環境学府人間共生システム専攻臨床心理学指導・研究コースに在籍していたころより、障害のある子どものきょうだいと母親への支援に関する臨床活動、研究に取り組む。同専攻の博士後期課程を単位取得満期退学後は、教育・医療・福祉の各分野における臨床に携わり、現在の所属に至る。		

1. 研究の概要

本研究は、日本においてヤングケアラー研究を進めていくことを目的としている。ヤングケアラーとは、この分野の研究の第一人者である Becker によると「家族メンバーのケアや援助、サポートを行っている18歳未満の子ども。こうした子どもたちは、恒常的に相当量のケアや重要なケアに携わり、普通は大人がするとされているようなレベルの責任を引き受けている。」と定義されている。

近年、イギリスやオーストラリアといった先進国を筆頭に、ヤングケアラー支援が活発になっている。日本においても、2018年より厚生労働省が全国調査を始め、ヤングケアラー支援が国の施策にも導入されつつある。しかしながら、国内で実施されているヤングケアラーの研究は未だ少なく、「若年介護者」などといった視点から捉えても、心身の発達や人間関係への影響について注目しているものはほとんど見られない。そのため、本研究で、親や兄弟姉妹が病気や障害を抱えていることにより年齢や能力以上の家庭内役割や責任を担っている子どもに対し、そのような経験が子どもの心理状態や認知に及ぼす影響を肯定、否定といった両価的側面から明らかにし、臨床心理学的支援の必要性について検討していくことは重要な取り組みであると考えられる。

これらを踏まえ、今回はヤングケアラーのケア役割を担った経験に対する認知の両価性について、質問紙を用いた調査を実施し、得られたデータを統計的に解析することでその特徴を明らかにしている。ヤングケアラーとしての自身の経験を過去のものとして振り返り、評価することができるという点から調査協力者を青年期の大学生とし、ヤングケアラーだけでなく、定義には当てはまらないが一時的なケア役割の経験がある者も含めた結果を明らかにしている。

2. 研究の動機、目的

本研究は、病気や障害といったものが当事者だけでなく、その家族に与える心理的な影響について捉え、具体的な支援に還元していくことを動機としている。そのため、今回は、ケアの負担の軽減に影響を及ぼすと考えられるケア経験に対する肯定的側面にも注目したうえで、ヤングケアラーや一時的なケア役割経験がある者のケア役割経験から生じる心理的影響や、その役割に対する認知的評価の特徴を明らかにすることを目的としている。

3. 研究の結果

①大学生のケア役割経験の実態

今回の調査では、女子大学生 216 名の有効回答の中からケア役割経験があると回答したものは 63 名であり、全体の約 35%が家族のケアを経験していることが明らかとなった。ケア役割経験の時期については、過去に経験があると答えたものが 34 名、現在と答えたものが 24 名であった。また、ケア役割を 1 年以上担っている（いた）と答えたものが 45 名、1 年未満と答えたもの 12 名であった。

②ケア役割経験から生じる心理的影響

大学生のケア役割経験から生じる心理的影響については、ヤングケアラーの心理尺度として作成されたものを用い、否定的側面として「実質的負担」や「過剰なケア役割」、「不自由さ」、「安否の心配」「逃避感情」、「罪悪感」、また肯定的側面として「自覚的成長」や「家事への貢献」、「積極的関与」がそれぞれどのように生じるのかを調査した。その結果、ケア役割経験が一時的なものも含む 1 年未満である場合、1 年以上その役割を担っている者よりもケアを担っていない状況に対する「罪悪感」が生じやすいということが明らかとなった。このことから、大学生あるいはそれ以前のケア役割経験においては、ケア経験の期間が短い場合に家族間のケアに対するコミュニケーションが十分でなく、要ケア家族の障害や疾病に対する知識が不十分であること、あるいは要ケア家族が必要としているケア内容についての十分な共通理解がないままに過剰な責任を感じてしまう可能性があることが示唆された。

また、要ケア家族が誰であるか、あるいは要ケア家族の状態の違いにおいても、その経験から生じる心理的影響に違いがあることが明らかとなった。要ケア家族が親である場合は、祖父母のケアよりも「過剰なケア役割」を担っていること、そして、要ケア家族が要介護の状態である場合よりも障害や幼さのある状態である場合に「不自由さ」を感じやすいことが分かった。一方、幼さや障害のあるきょうだいのケア役割経験については、祖父母のケアを担う場合に比べて「自覚的成熟」を感じやすいことが明らかとなった。

③ケア役割に対する認知的評価

大学生のケア役割に対する認知的評価では、介護者に対して肯定的側面と負担感を測定するために作成された尺度を用い、介護に対する否定的な側面として「拘束感」や「限界感」、「対人葛藤」や「経済的負担」についてどのように認識しているかを尋ねた。また、肯定的な側面としては「介護状況への満足感」や「自己成長感」、「介護継続意志」について尋ねたが、その結果、どちらの側面においてもケア役割経験の期間や時期による違いは見られなかった。一方、要ケア家族が誰であるかという違いについては、要ケア家族が親である場合、きょうだいや祖父母の場合と比較し「経済的負担」が大きいと認識していることが明らかとなった。これまでの研究でも、子どもからのケアを必要としている親の子育て相談の中で、その多くが経済的不安について語られているものがあるが、今回の結果からはこのような家庭では親だけでなく大学生あるいはそれより以前の子どもも経済的負担を強いられている可能性があることが示唆された。

また、要ケア家族の状態による違いでは、「拘束感」「限界感」「対人葛藤」「経済的負担」において差があることが明らかとなった。まず、要ケア家族の状態が要介護あるいは障害である場合において、一時的なケガや病気の家族のケア役割よりも「拘束感」や「限界感」を認識しやすいことが示唆された。さらに、要ケア家族の状態が障害である場合において、一時的なケガや病気の場よりも「対人葛藤」を認識していることが明らかとなった。ここでの「対人葛藤」は要ケア家族に対する葛藤、あるいはその他の家族に対する葛藤を表しているが、要ケア家族の状態が障害である場合、障害のある本人やその家族の障害受容の程度、精神障害や知的障害などで生じる外見と内面のギャップや状態像に対する理解の困難さなどが影響している可能性が考えられた。

4. 研究者としてのこれからの展望

今回の研究では、家族のケア役割経験が及ぼす心理的な影響について新しい知見が得られました。現在は、追加調査として同様の協力者にインタビュー調査を行い、質的なデータも含めて考察を行う予定です。さらに、今後はこれらがアイデンティティや人間関係の形成にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにし、ヤングケアラー支援の一助にすることを目指します。これらの研究に取り組んでいくことで、研究者としてヤングケアラーに対する理解と支援を広げること、また教育者をはじめ子どもたちを支える立場の人々へ有益な知識と対応を示すことができると考えます。

5. 社会（寄付者）に対するメッセージ

寄付者の皆様、調査に協力してくださった皆様、お力添えをいただき誠にありがとうございました。研究を遂行する上で必要な環境が整えられたこと、これから取り組むべき研究の最初のステップを形にできたこと、とても感謝しております。今後も自身の研究を重ねていく中で、多職種他領域の方々よりご意見をいただきながら精進し、障害を抱える方、そしてその家族の方々への理解と支援の一助となれるよう努めてまいります。